

中野重治全集

第十三卷

筑摩書房

中野重治全集第十三卷

一九七九年五月二十五日初版第一刷発行

著者 中野重治

発行者 関根栄郷

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号 一〇一—一九一
電話 〇三(例)七六五一(営業)

振替 東京六四一一二二三
(例)六七一一(編集)

印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

装釘 折久美子

第十三卷 目次

政治と文学

後記

著者うしろ書 真面目さと至らなさと
解題

政治と文学

わたしの信条

『人民文学』と江馬の言葉

架空中国留学記

短歌雑感

沢野久雄の「道化師」について

石川達三と平林たい子とに

地方選挙と文学の目

「現代民衆詩選」について

嘘と文学と日共臨中

常識の線

一つのからくり

思いつくままに

時のちがい所のちがい

心持ちとして

三

三

二

六

四

六

七

四

四

五

六

九

七

四

日本の目

八〇

わたしはこんなことを望む

一〇二

いいことだ

一〇四

その町その村のこと

一一〇

わたしの答

一一二

これからの話

一一三

最低綱領の問題

一一五

権威の問題

一一七

詩のこと文学史のこと

一二四

わたしは誰でしょう

一二五

経験から

一二五

利欲にくらんだ目

一二六

通信員を

一二七

朝鮮の細菌戦について

一二九

サークル誌めぐり

一三五

軍隊の問題

一二〇

日本の昔ばなし

二六

鹿地のことについて

二八

人権のための国と人権を侵すための国

三六

文学と社会・政治記事

三九

なかなか書けぬ次第

三四

真実一本槍

三六

清潔な人、なつかしい人

四一

市役所の揭示

四二

日教組の高知大会から

四三

外国文化の受け入れ方について

四九

きびしい顔

五七

外国文化の取り入れ方について

六三

きょうの感想

六六

文学サークルの二つの問題

七二

原爆の日と朝鮮での停戦

九六

きょうという日

九七

今日の文学と今日の教育	二九八
松川事件とローゼンバーグ事件	三二
実験回数	三八
われわれ自身のなかの一つの捨ておけぬ状態について	三九
めくらの垣のぞき	三五七
たれか故郷を思わざる	三九五
「現在のよな姿が好ましくない」ということについて	三九八
来年の集まりのために	四〇八
大西の「黄金伝説」について	四〇九
詩人の出る幕	四二
和解の道	四三
満足途上	四三
語ること・書くことの自由	四三
理解と希望	四四一
久保山さんの死をかなしむ	四四八
それにつけても	四五四

学問の尊重

戦後十年

新日本文学会第七回大会の性格

テープレコーダー挿話

典型ということ

タマシイのこと

「読書ノート」の問題

外とのつながり

学者のつとめ

通俗的な面

民主的と文学的

書き手と読み手

獅子のような女

味村検事の投書

アイゼンハウアー氏と蠟山氏

正美君つれだしの問題

四五六

四七七

四九九

四六一

四六二

四六五

四六六

四七七

五〇三

五一八

五二六

五三〇

五三四

五三七

五三九

五四二

徳田書記長の死を聞いて

人の記憶

文学と平和の問題

打ちこまれたクイ

内輪の話

大学生と青年労働者

洪水と軍事教練

見本市の豆

地理と歴史

一九五六年の問題の一つ

二つのこと

外国とのつながりの新しい段階

異議あり

自民党は考えなおせ

扱いを丁寧に

芥川賞について思い出

五四四

五四五

五四七

五四九

五五〇

五五二

五五八

五六一

五六四

五六七

五八三

五八九

五九三

五九八

六〇三

六〇八

六全協は自慢の種になるか

六七

独立作家クラブのころ

六八

「アジア・アフリカ諸国とひと口に」

六三

大東京五百年祭の砂川町

六六

通訳『クロハタ』説

六九

異議あり

七三

政治と文学

わたしの信条

わたしの受けた問はこうである。

おまえは、おまえの仕事と世のなかとつながりについてどう考えているか。(この「いるか」が「おるか」となっている。「おるか」という言葉はまちがいではない。しかしわたしは、ある条件をつけたとき以外にはこの言葉を使わない。わたしはこの言葉が好きでない。日本の国会の速記録は、人がいくらはつきり「いる」と言つても「おる」と印刷する。国会の速記者たちは——そのなかには女が少なくない。——日本でも虐待されているほうの労働者だが、彼らの力で、「いる」と「おる」とが一日も早く速記録の上で区別されるようになることを望む。)またこの世で、何を失いたくないもの、残しておきたいものと考えるか。それを、「現代の日本を代表する各方面の方々」の一人として答えよ。

わたしは苦笑いせずにはいられない。おまえが、このわたしが、「現代の日本を代表する各方面の方々」の一人なのか。しかし再びわたしは苦笑いする。「各方面の」とは含みのある言葉だ。何ものもそれに含まれずには残るまい。憲法では、天皇は国の象徴ということになつてゐる。象徴といえは何かを代表するものということになるだろう。しかし天皇は、国のとはいつても、汽車に汽車賃を払わずに乗る場合、あるしやれた呼び名を与えられる大多数の日本人生活を代表するものではない。憲法で代表者であるかのように規定されていてさえそうである。まして憲法はこのごろしきりに踏みこえられ、飛びこえられてさえいる。わたしが何かを代表するとすれば、それは憲法の規定に基いてではなく、憲法を無視してではないが、むしろ憲法をまもうとするものとして、

しかし憲法の規定にかかわらずに何かを代表するものということになるだろう。

しかしその何かをも、いまのところわたしは全的には代表しない、代表することができない。わたしは今わたしの信条について書くが、それは、信条のある人びと、それについて書く人びとを、全的に代表してではない。わたしは今この原稿を売るが、それは、原稿を売る人すべてを代表してではない。ある「方面」をわたしが代表するとしても、その「方面」をわたしは狭く代表するものということになるだろう。そうして、ある「方面」を割合に狭く代表する、代表しているというのが、わたしの仕事と世のなかとのつながりについてのわたしの考えである。

わたしは文学者として世のなかにつながっている。普通このつながりは、本来広いもの、広がるべきものとなっている。わたし自身も、文学者としてのわたしと世のなかとのつながり、わたしの仕事・文学と世のなかとのつながりが広いものであることを望んでいる。そして、その狭いのを残念に思っている。しかしこの狭いについては二つの原因がある。二つといつてもよく一つといつてもいいが、仮りに二つとして説明すれば、一つはわたし自身が狭いからであり、一つは、言葉としておかしくなるが、わたしが広いからである。

文学者としてのわたしが狭いという意味は単純である。わたしの生活の幅が狭い。知識が狭い。実際世間の見聞が狭い。ものを考える考え方の方式が狭い。特にこの考え方の問題は、わたしの方法論がまだまだ不完全だという意味になるが、ひと口に言えば、ある広い高みに立つて、すべてこれらの狭さ、低さを藝術的に整理して綜合する力がわたしにまだないということである。そこでわたしの書いたものが望ましいほど多くの人びとに読まれない、望ましいほど多くの人びとには理解されないということになる。

ただ少し考えてみると、やはり方法ということにもなるが、わたしのこの狭さは、間口が狭いということよりも奥行きが狭いということ、物ごとをわたしが突きつめて考えないということに基いているらしく見える。あるときわたしは、戦後の日本、その民主主義にふれて、「真昼そのものが闇であるような世界」というようなこと

を書いた。またあるとき、共産党が選挙で相当の成績をあげた結果、共産主義者のなかのあるものが、いまやわれわれは「政権に近づいた」というようなことを言いだしたとき、われわれが「政権に近づいた」ということはない、一般にわれわれが政権に「近づく」ということはなからうということを、口にも言い筆にも書いた。しかしただそれだけにとどまつて、その考えをいつそう進めることはしなかつた。(それだからあるとき、わたし自身「近づく」という言葉を、いま言つたことを指摘したあとで書いている。)もしわたしが、そのとき考えをもつと突きつめて行つたとすれば、「近づいたということはない」という消極的な地点を抜けて、もう少し積極的な地点へ出られたのだつたろうと思う。そしてそこでならば、わたしは世のなかと、明らかに広い関係で結びつくことができたらうと思う。またもしわたしに広い知識・幅のある生活があつたとすれば、わたしが消極的な地点に踏みとまらずに、積極的な地点まで進むよう知識・生活の幅の広さの方でわたしを刺戟したのだつたろうと思う。しかしまた、本来わたしにもつと突きつめて考える力があれば、突きつめて考えるためにも材料をひろく集める努力が自然うまれたらうから、結局のところ、突きつめて考えることにおけるわたしのせまさがわたしを或る消極的な地点にとどめ、その結果、積極的な広い地点で世のなかと結びつくことをわたしに妨げたということになるだろう。要するに、物ごとを突きつめて考える力の小ささがわたしを狭くしている、わたしの仕事と世のなかとを広い形で結びつけない原因になつていると思う。

もう一つの、わたしが広いために狭いという方は、わたしがいろいろのことに興味を持つていて、文学のうちのどこか一つの面に努力を集中しない、その結果いろいろの試みが散発に終つてしまつて、山を抜くなどはもちろん、砲台を一つ破壊するということでも行きかねているということである。これには我ながら弱つているが、しかしそういう仕事仕方をやめようとは今のところわたしは考えていない。だいたい日本には作家という言葉があるが、絵の方では絵かきのことを作家といつてゐる。文学の方ではおもに小説かきのことを作家といつてゐる。しかし文学の方ではというより雑誌などの方ではというのかも知れぬが、小説だけを「創作」と呼んでい

たりさえする。そういうのを見ると、わたしに、「小説が創作だど……」という気持ちが出てきて、そこでそれに興味をもつて引きずられることになる。わたしには、それが浅いものなのでいろいろに困るのではあるが、とにかく論理的なものに引かれる性質が割りにある。例がこまくなるのを厭^{いと}わなければ、わたしは、たとえば『ロンドン・ヘラルド』のティルトマンが——いつてもわたしは日本語で読むのだが——いまの日本の学生運動について書いているのを読んで、坂西志保^{しほ}にすっかり似たことを言っているのに気づいてこういう言葉をそこに見つける。

「わからないのは一つの暴虐政治から最近逃れでたばかりで、今日では民主主義的な考え方に支配された生活のあらゆる利益を享受している若い男女が、もう一つの暴虐政治——しかももしこれが成功すれば、言論の自由や思想の自由の権利を他のいつさいの権利とともにたちまち奪い去ってしまうような暴虐政治を採り入れるのに何^な故^ゆかように熱心でなければならぬかということだ。」

「率直にいつて、私は彼らの行為の動機を理解することができない。これらの青年たちはこれまでのどの日本の青年たちよりも安楽であり、また自由である。彼らをもっているのは立派な努力をする特権——新しいそして尊敬される日本を再建する特権である。抑圧的な軍事機構から解放された彼らは、全くの奴隷状態をつくるために働くべきか、あるいはそれに反対して働くべきか、あらゆる人間の権利たる尊厳を守るべきか、あるいはそれに反抗すべきかを選ぶことができる。」

人間としてまた文学者として、わたしはこの言葉が事実と論理と両方に合わぬと感じるだけでなく、それをたちどころに論理的に証拠だててみたいという氣に常にわたしが駆られる。この氣持ちは、つぎの言葉を見つけて微笑とともにいつそう強くなる。

「もし当該学生が日本の現状に満足していないならば、その矯正法はゼネストや暴動を行なうことではなく、自分の学業を卒^そえ、それから国会議員の選挙に立候補し、そして合法的な手段で法律の改革を試みることである。」